

採卵鶏の多羽数管理技術に関する試験

—育成期における飼料制限給与について—

佐藤忠夫・中西正士・池田公良

(大分県農業技術センター)

SATO, T., NAKANISHI, M., and IKEDA, K.

Studies on the large Scale Feeding Management System for Laying Hen.
On the Controlled Feeding for Raising Term.

育成期の制限給与方法については、44年度から48年度まで、西日本8県の共同で基礎研究が進められた。その結果、育成期間における制限給与は基準量の60%（春ヒナ）、80%（秋ヒナ）の量を4～18週の間給与した場合では、育成率、成鶏期の産卵成績、生存率に悪影響をおよぼすことなく育成飼料を節約し、発育を抑制するため、成鶏期における飼料消費量もわずかながら減少させ、経済性において有利となる傾向が示唆された。本試験は、このような基礎研究の成果をもとに、実用規模において実証するものである。

試験方法

1) 試験期間

49.7.5 (56日令)～50.9.21 (500日令)

2) 供試鶏および試験区分

バブコックB-300, 3,600羽これを制限給与区1,080羽, 自由給与区2,520羽の2区分とした。

3) 給与方法

制限給与区は8～18週令まで基準量の60%を隔日給与, 18週令以降不断給与した。自由区は慣行法とした。

試験成績および考察

1) 1羽当り飼料消費量

育成期の1羽当り飼料消費量は制限区5,317g, 自由区6,881gとなり, 1,564gの節減となった。成鶏期の1羽当り飼料消費量は制限区38,338g, 自由区38,998gとなり, 体重がやや小格化した制限区は解除後も少ない傾向であった。育成期, 成鶏期を通算した1羽当りの飼料節減量は2,224gとなった。

2) 育成率および生存率

57～150日令までの育成率は, 制限区96.6%, 自由区

98.3%で, 制限区がやや劣る数値となった。これは制限区にキャニバリズムと事故死が若干多かったためである。また151～500日令までの生存率は制限区96.0%, 自由区95.9%で, 両区共に良好でほとんど差は認められなかった。

3) 初産状況

50%産卵到達日令は, 制限区168日令, 自由区154日令で, 制限区が14日遅れた。また, 150日令までの1羽当り産卵量は, 制限区11.5g, 自由区112.4gであった。

4) 産卵成績

産卵率は, 151～210日令までは, 制限区が初産日令の遅れで劣ったが, 211日令以降から逆に1～2%高い産卵率で推移した。また, 1羽当り産卵日量も産卵率と同様の傾向であった。1個当りの平均卵重は, 産卵前期には自由区が0.1～0.4g大きかったが, 産卵中期には同じ程度となり, 産卵後期の390日令頃から再び自由区が約1g大きく推移した。151～500日令までの通算成績では, 産卵率, 1羽当り日卵量, 1ヶ当り平均卵重に大差は認められなかった。

5) 経済性

鶏卵収入から飼料費を差引いた1羽当りの粗収益は制限区465円に対し, 自由区322円となり, 制限区は自由区より143円上まわる成績であった。

要 約

採卵鶏の実用的多羽数飼養においても春ヒナに対する60%制限給与は育成率, 生存率, 産卵率, 卵重等に悪影響を与えずに, 飼料費の節減が可能であることが実証された。今後さらに秋ヒナでの検討, 採卵期間の延長, 期別給与等の実証が必要であると考えられる。